信心の血脈なくば法華経も無益

寛師、有師も御教示の根本方軌

未曾有の人間仏法の哲理

さて、以上の背景をふまえて、改めて冒頭の最蓮房日浄の質問を考えてみるとき、最蓮房は、おそらく、天台宗において、生死の一大事の法門を、血脈相承するといっては、伝授料をとったり、口伝を書きつけた紙切れを売ったりしている姿に大きな疑問を感じたものと思われる。仏法の重大な法門が売買され、商品化されている事実に、一種の憤りを感じていたにちがいない。

そこで、最蓮房は本来の生死一大事血脈の意義を求めて、日蓮大聖人に質問したとも考えられるのであります。当時の堕落した風潮とは異なり、真面目な最蓮房の質問に対し「貴（とうとし）貴（とうとし）」と称賛されたと考えることができる。この質問に答えられて、日蓮大聖人が、血脈の本義に立って、様々な角度から、縦横無尽に展開されていることは、これまでの講義で明らかにしてきた通りであります。

この講義の最終部分において、再び、その展開を簡潔にたどりつつ、いかにして日蓮大聖人が、血脈の本義を最蓮房日浄に、諄々と説かれたかを見ておきたい。

まず、冒頭で「夫れ生死一大事血脈とは所謂妙法蓮華経是なり、其の故は釈迦多宝の二仏宝塔の中にして上行菩薩に譲り給いて此の妙法蓮華経の五字過去遠遠劫（おんのんごう）より已来（このかた）寸時も離れざる血脈なり」と述べられ、法体即ち御本尊そのものが、生死一大事血脈であると決定されています。次に「然れば久遠実成の釈尊と皆成仏道の法華経と我等衆生との三つ全く差別無しと解（さと）りて妙法蓮華経と唱え奉る処を生死一大事の血脈とは云うなり」と説かれ、この法体が、実は衆生の生命の奥底を貫くものであり、南無妙法蓮華経と唱える衆生の生命自体が血脈であると展開されていきます。

そして、タテに、法体と衆生の生命の妙なる関係が、三世の生死にわたって永遠に持続していくという、血脈の悠久性を「過去の生死・現在の生死・未来の生死・三世の生死に法華経を離れ切れざるを法華の血脈相承とは云うなり」と述べられた後に、今度はヨコに、南無妙法蓮華経と唱えつつ、広宣流布にまい進する日蓮門下の異体同心の団結のなかにこそ生死一大事血脈は流れるのであると展開されています。それが「総じて日蓮が弟子檀那等・自他彼此の心なく水魚の思（おもい）を成して異体同心にして南無妙法蓮華経と唱え奉る処を生死一大事の血脈とは云うなり」との文であります。

すなわち、血脈は元来、衆生の生命自体に永遠に流れているものであり、法体の御本尊と衆生の生命との交合、そして、衆生と衆生との感応のなかに、生死一大事血脈は厳然と脈動するものであるといわれているのであります。

この衆生即人間に原点をおいた血脈論こそ御本仏の志向あそばされた大慈大悲の人間仏法の骨髄であり、眼目であり、まさに未曾有（みぞう）の哲理なのであります。

しかしながら、この大聖人の仏法の血脈を、継ぐか否かは、ただただ信心の二字以外にないというのであります。

それ故に、本抄の総結論として「信心の血脈なくんば法華経を持つとも無益なり」と厳しく仰せられているのであります。結局、信心に始まり、信心に帰結する。

冒頭より、四つの角度から展開されてきた生死一大事血脈も、信心なくんば一切虚妄（こもう）に帰すのであり、逆に信心のあるところ、一切が成就していくのであります。「信心の血脈なくんば法華経を持つとも無益なり」——法華経という法のみでは、真実の成仏の道には入れない。法華経を身をもって読み、人法一箇の当体と現れてくださった日蓮大聖人に直結した信心——これが「信心の血脈」なのであります。この人法につながった信心でなくては、いかに法華経を持っているといっても無益なのです。更にこの文は、信心のなかにこそ御本尊の仏力・法力もあらわれるというご指摘でもあります。

観心本尊抄は正確には「如来滅後五五百歳始観心本尊抄」といい、読み方は「如来滅後五ノ五百歳ニ始ム観心ノ本尊抄」です。この「観心ノ本尊抄」の「ノ」の字について、日寛上人は特に重要であると強調され、その講義が聞書（ききがき）等に伝えられて残っております。

日詳聞書には、

「ノノ一点ハ最大事ノ中ノ大事ナリ、是即チ一点多生ヲ助クル、返ス返ス日寛ガ形見トシテ汝等信心ニ之ヲ伝ヘヨ」とあり

日相聞書には

「此ノノ字ノ一点ヲ日寛ガ形見トシテ各信心ニ之ヲ伝ヘヨ」とある。

また寛井略記には

「ノノ一点ハ多生ヲ助クル肝心ノ点ナリ、日本国ノ学匠未ダノノ一点ニ達セズ」とあります。

なぜ日寛上人は形見とまでに強調されておられるのか。それは大聖人の仏法においては受持即観心で、受持することが重要であり、受持とは観心、つまり信心であるということを教えられているのであります。つまり「観心ノ本尊」とは「信心の本尊」といえるのであります。

有名な「日女御前御返事」の一節に「此の御本尊全く余所に求る事なかれ・只我れ等衆生の法華経を持ちて南無妙法蓮華経と唱うる胸中の肉団におはしますなり……此の御本尊も只信心の二字にをさまれり」とある。御本尊も信心の二字におさまっているとの大聖人の明言であり、信ずるなかにこそ御本尊の力は顕現されるということなのです。

日寛上人は「観心本尊抄文段」において「我等この本尊を信受し、南無妙法蓮華経と唱え奉れば、我が身即ち一念三千の本尊、蓮祖聖人なり」といわれ「故に唯仏力・法力を仰ぎ、応に信力・行力を励むべし。一生空しく過して万劫悔ゆることなかれ」と結論されているのであります。

このように「信心の血脈なくんば法華経を持つとも無益なり」とは実に厳粛なご指摘なのであります。信力・行力がなければ仏力・法力はあらわれませんし、もったいなくも我が身が即一念三千の本尊とあらわれるはずもないのであります。「血脈」とは「信心」である——ということに、一切は尽きるのであります。

実に、この信心の血脈ということに関して、第九世日有上人の「化儀抄」には次のように述べられています。

「信と云ひ血脈と云ひ法水と云ふ事は同じ事なり（中略）高祖已来の信心を違へざる時は我れ等が色心妙法蓮華経の色心なり、此の信心が違ふ時は我れ等が色心凡夫なり、凡夫なるが故に即身成仏の血脈なるべからず」と。

この化儀抄を解説した堀日亨上人の「有師化儀抄註解」には、次のような説明を加えられております。

「信心と血脈と法水とは要するに同じ事になるなり、信心は信行者にあり・此信心に依りて御本仏より法水を受く、其法水の本仏より信者に通ふ有様は・人体に血液の循環する如きものなるに依りて・信心に依りて法水を伝通する所を血脈相承と云ふが故に・信心は永劫にも動揺すべきものにあらず・擾乱すべきものにあらず、若し信が動けば其法水は絶えて来ることなし、爰（ここ）に強いて絶えずと云はば其は濁りたる乱れたる血脈法水なれば・猶（なお）仏法断絶なり、信心の動かざる所には・幾世を経とも正しき血脈系統を有し仏法の血液活潑に運行す」と述べられております。

また「仏法の大師匠たる高祖日蓮大聖人開山日興上人已来の信心を少しも踏み違へぬ時、末徒たる我等の俗悪不浄の心も・真善清浄の妙法蓮華経の色心となるなり此色心の転換も只偏（ひとえ）に淳信篤行の要訣にあり、若し此の要訣を遵奉せずして・不善不浄の邪信迷信となりて仏意に違ふ時は・法水の通路徒らに壅塞（ようそく）せられて・我等元の儘の粗（あら）凡夫の色心なれば・即身成仏の血脈を承くべき資格消滅せり、悲しむべき事どもなり」とも峻厳に記録しておられます。

すなわち血脈相承といっても、我々に約していえば、総じてそれは特殊な事柄や、特別の儀式のなかになされるものではなく、信心のなかに受け継がれるものであることが明確であります。もちろん、御本尊書写という血脈は、遣使還告（けんしげんごう）唯授一人の代々の御法主上人のお立場であり、尊いご使命であられる。

しかし、我々地涌の菩薩には、日蓮大聖人ご遺命の広宣流布に向かって、それぞれの重要な使命があり任務があることは明らかなのであります。もし、広宣流布という目標を失ったならば、大聖人の仏法は観念と形式に堕し、のみならず、御本仏の金言は、すべて虚妄になってしまうことを恐れるのであります。

ともあれ、御本尊は、根本尊敬の体であり、一切の根源であります。この一点を見失い、本末転倒の考えを抱くとすれば、それは大謗法といわざるをえない。ともに、信心の血脈がなくなれば、御本尊の仏力、法力は涌現しないのであります。

かつて「私は、だれだれから直接に御本尊をいただいた」と威張っておる人がいました。しかし戸田先生は、そのような人に対して「信心がなければ宝のもちぐされだ」また「かえって御本尊に信心を直結させなければ危険である」と言われていました。確かに、過去においても、その言葉の通り、信心なくして不幸な日々を送っている、なまなましい姿を、私は多く知っております。

しかして、その信心とは日蓮大聖人、および日興上人に学ぶべきであるとの仰せであります。故に、大聖人の御書に学び、日興上人の遺誡置文を肝に銘じつつ広宣流布のため不惜身命の実践を貫く創価学会の信心のなかにこそ、御本仏の血脈が「活潑に運行」していることを断言するものであります。

なお、本文中〝法華経〟が持つところの法であるのに対し〝信心〟は人の立場です。それは、御書全編を通しての時にかなった実践ということでもあります。したがって更に約していえば、末法広宣流布の時にかなった実践の範を示された初代牧口会長、二代戸田会長の跡を継ぐ、創価学会の信心の血脈こそ、最も正しい仏法修行の軌道であることを強く確信していただきたいのであります。

共戦——この広布開拓の創価の実践に生死一大事血脈は厳然（福島文化会館に立つ池田会長の石碑）

池田会長の「生死一大事血脈抄講義」（S52年）

御法主日顕上人猊下お言葉

第四十四回 行学講習会開講式の砌

平成九年八月九日
於 総本山中講堂

そこに本宗の、この総本山大石寺の元が存するわけであります。もちろん、その間において、師弟相対して大聖人様の居（い）ます身延の沢において『御義口伝』その他の御法門の相伝があり、さらに唯授一人の法体（ほったい）血脈の伝授があり、その上にそれらをすべて包むところの信心の血脈があって、初めてこの仏法が正しく日興上人へ伝えられておるのであります。

ですから、その日興上人の正意を今日に至るまで、いささかも変ずることなく伝えておる日蓮正宗こそ、真の仏勅（ぶっちょく）の団体、広宣流布の一番の本源の団体、それが日蓮正宗であります。

では、創価学会はどうかっていうと、その途中から派生したものである。昭和五年から牧口常三郎という人が始めたんだ。ところが、初めのうちは創価学会ってものは、特に「創価教育学会」といって、教育者の集いというような形であって、必ずしも、今の創価学会とは形態的にも違っておったわけであります。

ところがその後、終戦後において、戸田城聖という人が、昭和二十七年において宗教法人を取ってしまった。これは当時として遺憾ながら、宗門としてそれを認める状況、認めざるをえない状況にあって、これを一往、許可した形がありました。しかし、ともかく、そこからさらに創価学会の横暴・邪悪が次第に発展してきて、今日の池田大作のような、あの自分の我見が中心となり、そこに「創価学会に大聖人の仏法がある」というような、実に大それた反逆、大逆、背逆の思想を固く持って、この日蓮正宗を誹謗するに至っておる。

しかも「日顕宗」などと言う。「日顕宗」なんて一体どこにある。日蓮正宗を敵とすることは、規則上、非常にはばかれるために、やむをえず「日顕宗、日顕宗」と言って、わけの判らない言い方をしながら、とにかく実際は日蓮正宗を誹謗しておる。これこそ、天魔・魔性の団体であり、仏敵であります。

これはあくまで、先程も教学部長の話のなかにもあったように、「血脈相伝には法体の血脈、それから唯授一人・金口相承の血脈、それから法門の血脈、そして最後に信心の血脈という、この四つの血脈が挙げられるのである。しかし、それもことごとくは、法体の血脈が根本であるから、そこから離れて信心の血脈はないんだ。」ところが創価学会の者どもは、「信心の血脈」ということだけを言って、「御書根本」、「我々は大聖人に直結して、その信心の血脈が一切の、本当の血脈だ」ということを言っておるけれど、これは大聖人の御書をいい加減に並べて、そして切り文をもって全体の趣意を乱し、我見・我意でもって御書を解釈しておるという姿はないのである。これらの邪義は、だんだんこれから、おまえ達もはっきりとこれを知って、創価学会がいかに邪悪の団体であるかということを肚の底に入れて、しっかり折伏していってもらいたい。